主日礼拝説教「あなたが与えるようになるために」

日本基督教団石神井教会　2019年3月3日

【旧約聖書日課】イザヤ書　41章8～16節

8 わたしの僕イスラエルよ。
　わたしの選んだヤコブよ。
　わたしの愛する友アブラハムの末よ。
9 わたしはあなたを固くとらえ、地の果て、その隅々から呼び出して言った。
　あなたはわたしの僕、わたしはあなたを選び、決して見捨てない。
10 恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。
　たじろぐな、わたしはあなたの神。
　勢いを与えてあなたを助け、わたしの救いの右の手であなたを支える。
11 見よ、あなたに対して怒りを燃やす者は皆、恥を受け、辱められ
　争う者は滅ぼされ、無に等しくなる。
12 争いを仕掛ける者は捜しても見いだせず
　戦いを挑む者は無に帰し、むなしくなる。
13 わたしは主、あなたの神。あなたの右の手を固く取って言う
　恐れるな、わたしはあなたを助ける、と。
14 あなたを贖う方、イスラエルの聖なる神、主は言われる。
　恐れるな、虫けらのようなヤコブよ、イスラエルの人々よ、わたしはあなたを助ける。
15 見よ、わたしはあなたを打穀機とする、新しく、鋭く、多くの刃をつけた打穀機と。
　あなたは山々を踏み砕き、丘をもみ殻とする。
16 あなたがそれをあおると、風が巻き上げ、嵐がそれを散らす。
　あなたは主によって喜び躍り、イスラエルの聖なる神によって誇る。

【福音書日課】ルカによる福音書　9章10～17節

10使徒たちは帰って来て、自分たちの行ったことをみなイエスに告げた。イエスは彼らを連れ、自分たちだけでベトサイダという町に退かれた。11群衆はそのことを知ってイエスの後を追った。イエスはこの人々を迎え、神の国について語り、治療の必要な人々をいやしておられた。12日が傾きかけたので、十二人はそばに来てイエスに言った。「群衆を解散させてください。そうすれば、周りの村や里へ行って宿をとり、食べ物を見つけるでしょう。わたしたちはこんな人里離れた所にいるのです。」13しかし、イエスは言われた。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」彼らは言った。「わたしたちにはパン五つと魚二匹しかありません、このすべての人々のために、わたしたちが食べ物を買いに行かないかぎり。」14というのは、男が五千人ほどいたからである。イエスは弟子たちに、「人々を五十人ぐらいずつ組にして座らせなさい」と言われた。15弟子たちは、そのようにして皆を座らせた。16すると、イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた。17すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった。

主イエスは人々を迎え…

わたしたちの教会は、先主日の午後、定期教会総会を開いて、4 月からの次年度の計画を共有しましたが、皆さんの関心の多くは、新年度の教会役員にだれが選ばれるかということであったかもしれません。候補者としてすでに名の挙げられた人の中から、だれに投票するのか。いいえ、むしろ皆さんは、だれに投票しないのか、ということに気を遣われていたのかもしれません。選挙の結果はすでに出ていますが、今日午後の役員会では、最終的に選ばれた方たちのどなたが役員として就任してくださり、新年度の教会の働きの要となってくださるかを、確認することになっています。

教会の働きのために、信徒の皆さんがそれぞれに役割を担ってくださり、仕えてくださるのは、貴いことです。教会の奉仕は、自ら喜んで手を挙げて加わることもあれば、自分の意志ではなく与えられて引き受ける場合もあるでしょう。もちろん、わたしたちには、それぞれの生活があります。信仰を与えられて日々の生活を生きる者として、わたしたちは、教会の働きだけではなく、教会の外の世界、家庭や職場などでの働きもあります。どちらの働きも、貴いのです。教会の中での働きも、教会の外の世界での働きも、突き詰めればどちらも、神から与えられ、託された働きであるからです。

教会に集められてきた者として、わたしたちは、教会の働きを分かち合い、担い合います。もっとも、牧師や伝道師に任せておけば教会の働きは回るはずだ、とお考えの方もあるかもしれません。教会の業務（ビジネス）は、それで回るでしょう。けれども、教会の働き（ミニストリー）は、牧師や伝道師だけでは成り立ちません。教会に集められてきた皆さんが参与して初めて、教会の働きというものが回り始めるのです。

福音書日課（ルカ 9 章）は、主イエスのもとに使徒たちが帰って来たと描かれるところから始まっていました。この「**使徒たち**」とは、主イエスが弟子たちの中から選ばれた「**十二人**」のことです。主イエスは、十二人を選ばれて「使徒」と名づけられていました（6:12~16）。そして、彼らにご自身と同じ働きを与えられて、ご自分のもとから遣わされていたのです（9:1~6）。その使徒たちが、遣わされて巡った村々での働きを終えて、主イエスのもとに帰って来たときのことです。そのとき、主イエスは彼らをゆっくり休ませようと思われたのかもしれませんが、人々はそれを許しませんでした。主イエスと使徒たちが行かれた後を追って来た多くの人々がいたのです。その人々を、主イエスは拒むことなく迎えられました。そして、神の国について語り、治療の必要な人々をいやされたのです。

このとき、十二人の弟子たちは、どうしていたのでしょうか。どこかで休んでいたのでしょうか。休んでいた者もいたかもしれません。けれども、主イエスと一緒になって、神の国について語り、病人をいやしていた弟子も、いたのではないでしょうか。十二人は、まさにそのこと、「**神の国を宣べ伝え、病人をいやすために遣わ**」（9:2）される経験をしてきたばかりだったのです。今、主イエスと共にその働きを担える。それを喜びとした者もあったに違いありません。

神の国について語り…

十二人の使徒たちは、主イエスに遣わされて村々を巡ったとき、「**旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない**」（9:3）と命じられていました。何も持たずに行き、迎えてくれた家に留まって世話になるようにと、お命じになられていたのです。

この話を聞くと、わたしたちは、伝道者として遣わされる者はこのような覚悟をして働きに仕えるように教えられていると、考えるでしょう。実際、わたしども牧師や伝道師の働きに就かせていただいている者は、中には自分で生活費を稼いで自分の持ち家に住む者もいますが、多くの場合は、そのようにして遣わされた先の教会に住まわせていただき、生活の世話にもなっています。そのように主イエスから命じられていると、信じているからでもあるのです。

十二人の使徒たちは、そのような宣教の旅から帰って来て、主イエスのもとでの働きに戻りました。それが、この福音書日課の場面です。そして、そのときに起こったのが、あの五千人の人々に食事を与えた出来事だったというのです。

日が傾いてきていました。一日の働きを終えて、休息のときが近づいています。十二人の弟子たちの中にも、主イエスと共に働いて疲れ切っていた者があったでしょう。弟子たちは言いました。「**群衆を解散させてください。そうすれば、周りの村や里へ行って宿をとり、食べ物を見つけるでしょう**。わたしたちだって、同じなのです。**わたしたちはこんな人里離れた所にいるのです**から」。彼らは、思ったはずです。「さあ、一日の働きを終えるときが来た。今日も人々に神の国について語り、病む人をいやされる主イエスの働きを共にできた。十分に働いた。宣教の旅に遣わされていたときは、だれか招き入れてくれる人の家に行って、世話をしてもらい、食事もいただいていたが、今日はどうだろうか。どうも今日は、自分たちを皆招いてくれそうな裕福な人は、来ていなさそうだ。まあ、よいだろう。せめて、先生と自分たちだけ、ゆっくり休ませてもらえる宿をとって、のんびり食事にありつきたいものだ。」

ところが、主イエスは言われたのです、「**あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい**」と。わたしは、弟子たちの言い分ももっともだと思います。宣教の旅に遣わされたときは、自分たちで金も食べ物も持って行くな、招かれた家で世話になりなさい、と言われていたのです。ましてや、もう夕方です。「今から、まだ働くのですか、わたしたちが。今まで一所懸命に働いてきたのに。これから町まで食べ物を買いに行けと、先生はおっしゃるのですか。」

石神井教会には、今、夕べの集会が定例のものではありません。夕礼拝も、夕べの祈祷会も、普段はありません。皆さんから「新年度は、毎週日曜日の夕礼拝を始めてください。平日夜の祈祷会も始めてください」と言われたら、牧師は抵抗すると思います。拒めないとしても、「わたしがやるのですか」と問い返すと思います。十二人の弟子たちの気持ちは、よくわかると思うのです。

主イエスは、弟子たちに無理を強いられようというのでしょうか。「もっと働け」とブラック企業並みのことをおっしゃられているのでしょうか。

いやされた…

「**あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい**」。主イエスは、そうおっしゃられました。けれども、実のところ、このとき、主イエスは、十二人の弟子たちに食べ物の調達をさせたわけではありません。彼らは、パン五つと魚二匹を持っていましたから、それを出させましたが、町までパンと魚を買いに行かせたわけではありませんでした。ただ、主イエスは、弟子たちに命じて、人々を五十人ほどのグループに分けてまとめさせました。そして、人々を座らせたところで、主イエスは、パンと魚を取り、天を仰いで讃美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡したのです。人々に分け与えさせるためでした。

弟子たちがしたのは、二つのことです。人々を集め、まとめたこと。そして、主イエスから渡されたパンと魚を、人々に分け与えたこと。

実のところ、最初から主イエスがそのように弟子たちに指示してくださっていれば、弟子たちも、変な反論をしないで済んだのではないかとも思います。けれども、主イエスは、敢えて弟子たちに反論させるような話の振り方をしたのではないでしょうか。それは、主イエスが人々を迎え、神の国について語り、病む人をいやされた、その働きが、実のところどのようなことを目標にしているのかを、弟子たちに体験させ、身をもって知るようにさせるためだったのではないかと、わたしは思います。

主イエスは、敵対する人々から、「あいつは大食漢の大酒飲みだ」と批判されるほど、多くの人との食事の席を大切にされました。おそらく、毎晩のように宴会を開いたり、招かれたりしていらしたのでしょう。それは、しかし、ただの宴会好き、ということではなかったはずです。

主イエスは、宴会の席で、ときに大切な教えを語られました。宴会のたとえを語られたこともありました。すぐに思い起こすことができるでしょう。神の国の大宴会のたとえでは、最初に招かれていた人たちが来なかったために、町中の人々を片端から招き集めたと語られていました（14:15 以下）。放蕩息子のたとえでは、いなくなっていた放蕩息子が帰って来たことを喜んだ父親が、盛大な宴会を催したと物語られていました（15:11~32）。徴税人のザアカイは、木に登っているところを主イエスに呼ばれて、自分の家に主イエスを招き、宴会を開きました（19:1~10）。主イエスのお教えになられた「神の国」は、宴会という場にたとえられるもの、いいえ、宴会という場をわたしたちの間にもたらすものなのです。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」（17:20~21）と、主イエスは言われました。

「神の国は、食事の交わりに加えられるあなたがたの間にある」。五千人の食事の場で働きに加えられる中で、そのことを教えられているのではないでしょうか。その交わりに加えられることこそ、わたしたちの間の病をいやし、病んだ関係をいやし、神の国の真実にあずかり始めること。だから、さあ、あなたも始めなさい。あなたが彼らに与えなさい。そう、招かれているのです。